野田宇太郎 文学散歩

第10巻

文一総合出版

著者略歴　明治42年(1909)10月，福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念，久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで，出版編集に携わる。その間，雑誌『文藝』，つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり，以後，著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩の他，全詩集『夜の蜩』，近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』，木下杢太郎研究『きしのあかしや』，近代詩史『詩人と詩集』，キリシタン史『少年使節』，紀行随筆『日本の旅路』，戦中記録『灰の季節』，戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年，第1回九州文学賞(詩)受賞，昭和50(1975)年度藝術選奨文部大臣賞受賞，昭和52(1977)年，第3回明治村賞受賞，および紫綬褒章受章。昭和59(1984)年7月20日，没する。

野田宇太郎文学散歩　10
関東文学散歩　**定価2800円**

昭和60年5月1日　初版第1刷発行

著　者　野田宇太郎
発行所　株式会社 文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32
電話東京(291)8049　振替東京2-42149
代表者　奥村　武

© 1985
ISBN4-8299-1036-4　印刷・製本　奥村印刷

目

次

上州

上州とわたくし　七　安中　九　新島襄と安中　三　『十二の石塚』詩碑と半月の詩業　一八　湯浅家について　二　安中教会にて　二七　雲外湯浅治郎頌徳碑　三四　安中とベラスケス　三六　湯浅半月の墓　四〇　安中の変容　四七　磯部　五〇　『藍色の墓』の詩人　五二　大手拓次の生涯　五五　大手拓次の詩碑と墓　五九　妙義山遠望と『草鞋記程』　六五　根岸党の『草鞋記程』　六八　松井田の一夜　七一　妙義へ　七九　根岸党の妙義登山　八二　妙義に魅せられた人々　九一　中野逍遙と妙義山　一〇一　磯貝雲峰　一〇六　ブルーノ・タウトと洗心亭　一一四　タウトの豫言　一一三　タウトの道を辿る　一二四　高崎の推移　一二七　瀬沼夏葉の故郷　一三一　上州人内村鑑三　一三三　高崎の俳人、歌人　一三八　森鷗外と羽鳥千尋　一四二　前橋の変遷　一四四　詩人の街　一四六　「帰郷」のいざない　一四八　利根河畔の恭次郎詩碑　一五二　萩原朔太郎と故郷　一五七　萩原朔太郎の故家　一六四　政淳寺の萩原家の墓　一六九　広瀬川　一七一　平井晩村民謡詩碑　一七四　前橋公園　一七六　利根の松

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

原にて　一七九　街と川と詩碑　一八六　小出新道　一九〇　朔太郎の新しい墓にて　一九三　國定忠治の墓にて　一九七　長岡忠治の家を訪う　二〇五　山村暮鳥の故郷　二一〇　水沢観音と暮鳥　二一九

伊香保　二二五

おろかようかん　二二五　伊香保と『万葉集』　二二二　近世以降の伊香保　二二七　蘆花の死　二四〇　蘆花公園にて　二四五　榛名山　二五一　榛名湖と暮鳥の詩　二五九

赤城山　二六四

遠望　二六四　赤城の神　二七一　露伴と地獄渓　二七七　赤城山と志賀直哉　二八四

吾妻と草津　二八八

吾妻渓谷と川原湯温泉　二八八　寒山　二九六　草津の歴史　二九九　湯もみ唄　三〇一　ベルツの横浜上陸　三〇三　ベルツと草津　三〇九　訪れた文人達　三一三　志賀直哉の「矢島柳堂」　三一七　牧水の「みなかみ」紀行　三二一　六合村　三二三　暮坂峠の牧水詩碑　三四〇　牧水の草鞋とのゆかり　三四九　大岩小学校跡の

牧水歌碑 三三二　沢渡温泉にて 三三五

野州（しもつけ） 三三七

日光 三三七　ピエル・ロティの日光の印象 三三八　杉並木街道 三六〇　日光と文人たち 三六二　華厳滝 三六八　中禅寺湖畔 三七二　戦場ケ原 三七五　湯元温泉 三七七　那須野 三八二

関東文学散歩　付記

関東文学散歩は、上州に筆を起し、野州・常州を経て房総に至る構想のもとに企図された。著者はここ三十数年、これらの地への数次に及ぶ踏査と研究の上に、さらに本書執筆のため、改めて昭和五十八年より、前橋・高崎をはじめ、安中・松井田・妙義・赤城・榛名・伊香保・吾妻・日光に散歩の歩を進めつつ、原稿執筆に力を注いでいたが、全行程の半ばで逝去された。このため本書の内容は、目次に見る如く、上州から野州の一部に及ぶに止まった。これ以後も病軀をおして散歩を試み、逝去二か月前の昭和五十九年五月、野州塩原方面への旅行が最後の散歩となったが、これらは成稿に至らず、三十五年に及ぶ文学散歩を終えた。ここに遺稿をまとめ一本を作った。

（編集部）

＊別刷写真はすべて著者の記録撮影で本文と共に無断使用を禁じます。

関東文学散歩

上州

上州とわたくし

上州は古代の毛野国が上と下とに分れ、毛を省略して上野、下野と書きコウヅケ、シモヅケと呼ぶようになって上野国とも書かれたのが、中国の地名の影響ではじめの上の字だけを生かして国を意味する州の字をつけたものという。明治のすぐれた歴史地理学者吉田東伍の大著『大日本地名辞書』も群馬県の項は上野国（栃木県は下野国）とされていて、その中に上野国を上州と称したことについて「上野は近世の詞人或は修して上毛と為す、又上州と云ふことは、中古以来已に然り」と記されている。地名はそのまま生きた歴史でもあるから、現代でも上州という言葉は群馬県の代名詞として使われている。

群馬県前橋出身の詩人萩原朔太郎の昭和初期の「帰郷」という悲愴な情感に充ちた詩に、帰郷の汽

車の窓から幼児が母の乳房をまさぐるように故郷の風土を求めた「まだ上州の山は見えずや」という一行がある。上州の目印となる山は一般に上州三山といわれる赤城、榛名、妙義である。それらの名山を群馬県の山といわず、上州の山と云っているのは、詩語の調子のためだけではなく、やはり自分の故郷の歴史的呼称だから極自然に書いたのだろう。

わたくしがはじめて上州の旅をしたのは、昭和二十六年に「文学散歩」の第一冊『新東京文学散歩』を出版して、その中で世田谷粕谷に家屋敷がほぼ完全に保存され、徳富蘆花夫妻の墓もある恒春園を訪れてからである。蘆花の生涯を調べているうちに、蘆花や兄の徳富蘇峰の姉初子が、安中の素封家で、屋号を有田屋という味噌醤油の醸造所湯淺家の、湯淺治郎の後妻となり、八人の子の母となって、安中で新島襄から洗礼を受けたクリスチャンとして家業のほかに社会的にも大いに活躍した治郎を助け、そのために熊本の徳富家と湯淺家とはつよい縁で結ばれていることや、その治郎の弟が明治詩壇黎明期にエポックを劃した長詩集『十二の石塚』の詩人湯淺半月（吉郎）であることに、どこか蘇峰蘆花兄弟を出した熊本県の水俣を故郷とする徳富家と、家系的に相通ずるものがあるのを感じた。その湯淺家や新島襄を中心に安中というところを研究してみたいという気になり、ついでに蘆花の終焉の地となった同じ上州榛名山麓の伊香保温泉も一通り知りたい気持も加わって、東京上野駅から信越線で先ず安中を訪れたのである。それは蘆花会発行の研究誌「武蔵野ペン」の昭和三十三年六月創刊号に「上州文学散歩」の一部を発表する以前の二十八年だったと記憶する。その後三十五年に『日本の文学都市』を書くために前橋から高崎を経て旧中仙道を辿り、安中を再訪して以来、信州方

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

面へ向うような時には、必ず前橋からブルーノ・タウトゆかりの碓氷川べり八幡村の少林山達磨寺（現在高崎市）と安中は訪れるようになった。こうして上州とわたくしの縁はますます深くなったと云ってよい。

上州といえば近世末期には股旅者といわれて一般庶民に恐れられた無頼の徒の多い土地柄だったらしく、賭博をこととする一方、強きをくじき弱きを助ける仁侠の大親分として名を売った国定村の忠治とか、大前田村の英五郎とか、安中の草三郎（通称草三）と云った人々がいたことは講談や浪曲などで誰知らぬ者もないくらいだが、明治以後になると、皮肉なことに上州は詩人の風土のようになっているのである。わたくしが『関東文学散歩』を先ず上州からはじめることにしたのもそのためで、現在も人気の高い前橋出身の萩原朔太郎もすぐれた詩人には違いないが、上州の先覚的詩人はむしろ明治初期に、前記の個人詩集『十二の石塚』を安中の湯淺家から刊行した、湯淺半月を忘れることは出来ない。

安　中

はじめて訪れた安中は、板倉三万石の城下町というよりも、旧宿場町らしく、旧中仙道の国道の両側にどこまでも商家のつづく、長い一筋町だった。そこはいうまでもなく旧城下町安中の商人町で、昔の安中城内はその北側の少し高くなった台地であることを知ったが、もう城址は面影をとどめず、

一面の桑畑になっていて、表通りの旧中仙道筋は、その形だけは昔の宿場町のままだが、既に戦後のこととて、いやにけばけばしい店飾りの商店が並び、その町が終ったところから、これは見事な旧街道時代の旅人姿さえ偲ばせるような、巨木になった杉並木が、鬱蒼と両側に繁り立ち、その北側にも原市を通る中仙道の脇道が、やはり杉並木と共に残っていた。だが国道十八号線となった旧中仙道の杉並木は戦後のモータリジェーション時代を迎えて、排気ガスのため次々に枯死して、現在は伐採されて一本も生きのこっていない。

わたくしの記録によると、この安中は昭和三十三年十月まではまだ昔のまま中仙道の街筋だけだったが、その年十一月には街道筋の板鼻、中宿、原市のほか、南側を低く流れる碓氷川対岸の、妙義登山口に近い鉱泉町磯部などを合併して、ようやく人口四万三千の小都市となり、新らしい市廳舎も安中の西の街外れに出来ていた。

この辺りの安中から碓氷寄りには信州の軽井沢までの間に、松井田、横川、坂本の旧三宿があって、横川は昔の関所のあったところでもあり、碓氷峠への列車の登り口でもあるために、観光都市のように落着きのない町になっているが、妙義山の登山口としても昔から賑わった松井田や、碓氷越えの鉄道から離れていたために、ただ道路が拡張されただけで、旧宿場の姿をいくらかとどめている坂本と、碓氷川というよりも渓谷の対岸には悠久変らぬ奇岩奇勝の名山妙義が迫り、わたくしはそこを列車や車で通るたびに、十数年前に西ドイツからオーストリアのアルプス山麓を辿ってスイスまで旅をしたチロル渓谷をまざまざと思い出す。もし敗戦後の日本が経済高度成長国などと贅らずに、徐々

に質素な復興をしていたら、自然も昔のままに護られて破壊もされず、チロルに比べても遜色のない美しく静かな碓氷渓谷がそのまま保たれていたろうにと惜しまずにはいられない。安中も以前の町のまま、松井田、横川、坂本と旧宿場の面影をとどめる歴史と自然を保護していたら、安中西外れの貴重な杉並木なども旅人をよろこばせていたに違いない。ここで安中の歴史を少し辿っておくことにする。

安中は前にもふれたように板倉藩の城下町として、また中仙道の宿場町として栄えた小都市だが、『太平記』には建武二年（一三三五）頃からの記録があり、『関東古戦録』という稗史には上杉武田の戦いのときは安中左近大夫廣盛の城があり、廣盛は上杉方に加担して苦戦した末、武田方に降ったが、その後の態度が神妙だったので、武田信玄は廣盛をゆるして、そのまま安中城主とした、と記されている。戦国の世も過ぎて江戸時代になると、元和元年（一六一五）に近江彦根から井伊右近大夫直勝が安中三万石の大名として封ぜられ、正保二年（一六四五）にまた三河西尾に移封されたあと、水野、堀田と安中藩主は替ったが、延宝九年（天和元年、一六八一）には板倉伊豫守勝清が安中藩主となり、それ以来、安中は板倉氏の城下町として明治維新まで続いた。この板倉藩約二百年の間に、安中は今日の基礎を築いたと云ってよい。とくに文政三年（一八二〇）から藩主となった六代の板倉勝明（最後の藩主勝殷（かつまさ）の先代）は、文武両道をわきまえた名君で、幼少時代から読書を好み、徳川幕府の信頼も厚く、天保八年（一八三七）と十年には大坂城の加番として大坂にとどまり、安政四年（一八五七）四月、安中で四十九年の生涯を終っているが、青年時代、学問のために江戸に出て、林檉宇、

古賀侗庵に経史を学び、大坂城在任中は読書の時間が惜しいため出来るだけ公用以外の訪客は断ったという話さえ伝わっている。また自ら文学を愛して『西征紀行』『東還日記』のほか『遊中禅寺記』などの著書がある。つねに藩士の子弟の教育に意をそそぎ、大山融齋や山田三郎などの学者を藩に迎えて和漢の講義をさせ、また武術では高島秋帆の新砲術などを藩士に習得させたという。殖産としては紙の原料となる楮や、漆を作る漆の木、良材としての杉などの栽培を奨励し、また藩士に信州境の碓氷峠宿町にある権現神社まで徒歩競走をさせて、体育と娯楽を兼ねるなど、あらゆる面で新らしいことを考案して藩士藩民をへだてなく愛育した。

特に勝明の業績として逸せられないのは、室鳩巣の『文公家礼通考』その他先儒の著述が、原稿のまま未刊行になっているものを苦心して蒐集し、それを『甘雨亭叢書』として自ら校訂し、弘化年間から安政年間までに本集五集、別集二集、全五十六巻を出版していることである。甘雨亭は勝明自身の雅号で、いかに叡智に充ちた人物であったかがわかる。この勝明の文雅を愛する精神はその嗣勝殷（かつまさ）にも受けつがれ、明治になって新文明の基礎となり、先ず新島襄や、湯淺治郎、湯淺吉郎（半月）などのすぐれた人物を出すこととなった、と云ってよい。

新島襄と安中

新島襄については既にその生誕の地東京神田錦町の項（全集第三巻東京文学散歩・下町篇下）や京

都若王寺山同志社墓地の墓前でも書いているが（全集第十八巻関西文学散歩・京都近江篇）、新島家は安中板倉藩士で、新島襄が幕末に国禁を犯してまで北海道函館からアメリカへ脱国し、西洋文化や科学の教養を身につけ、プロテスタントとなって十年目の明治七年（一八七四）十一月に無事帰国して、翌八年には早くもミッションスクールとして同志社英学校（現在の同志社大学）を京都に開校したことは周知のことだが、それより先、横浜に上陸すると新時代の首府となっていた東京では、当時の外務省に立ち寄っただけで永くはとどまらず、江戸屋敷から既に故郷に引き揚げていた父母に先ず帰国報告をするために、直接、人力車を走らせて昼夜兼行で上州安中に向い、肉親と共にお互いの健在をよろこびあって、直ちに安中の人々に新世界の実情を語り、キリスト教布教にかかったのだから、まだキリスト教的思想の教育が全く芽生えていなかった京都に新島が同志社を開校する前提ともなった地として、また関東地方のプロテスタントの発祥の地としても安中を忘れてはならない。そのことについて、わたくしは既に昭和三十三年の「上州文学散歩」に「桑園の中の家」と題して書いているので、それを次に写しておく。その内容は新島関係の各地で書いたことといくらか重複するが、訂正加筆もあるので敢て新稿として読んでもらいたい。

○

新島襄は天保十四年（一八四三）正月十四日（新暦二月十二日）に、安中藩士新島民治（後に是水と号す）を父として江戸一ツ橋の板倉藩江戸屋敷で生れた。父民治は江戸詰の藩の右筆（ゆうひつ）として、板倉勝明の側近にあった人で、襄はその長男、上に四人の姉があり、下に弟一人がいた。十六歳にして、

父と共に右筆の一人となり、餘暇に蘭学を修め、やがて藩命で海軍伝習所に入所して航海術を学んだが、ある時、友人のところで偶然に漢釈聖書の抜萃をみて好奇心を覚え、それを借りて読むうちにキリスト教に関心を抱き、是非とも西洋の言葉でそれを読みたいと思うようになった。当時の西洋といえばオランダ語である。江戸で蘭学の初歩は学びはじめていたが、それは主として兵術に関する用語程度のもので、聖書の理解に役立つものではなかった。ともかく仏教とは違ったキリストの愛の教えに心を引かれていたのだが、まだキリスト教は御法度の時代だったから、ただ蘭学をもっと深く学びたいという願いを藩に申し出たところ、豫て襄が秀才であることは知られていたので、許されて北海道函館に洋式城砦五陵郭を築いたすぐれた兵法蘭学者武田斐三郎がいることを知り、その武田塾入門のため遠く函館へ向った。ところが武田はあいにく江戸に出ていて行き違いになっていたので、当時、ロシアから函館に来ていたギリシア正教ハリストス教会の宣教師ニコライに近づいて、学僕のような立場でニコライの不自由な日本語を助けるアルバイトをしながら武田斐三郎の帰塾を待つことにした。そのころ同じく外国文化に関心を持って安政六年の開港以来、外国船との貿易に携わる青年福士宇之吉と青年らしい親しい交わりを結び、日本人の海外遊学の必要を痛感するようになった。新島はたまたま近く中国の上海に向うアメリカの船があることを福士に教えられ、ニコライに日本脱出の意志を打ち明けた。しかしそれがどんなに危険かを知っているニコライは新島の決死の行動をやめさせようとしたが、同じ日本青年の福士は、新島を助けて函館港監視役人の眼をくらませるために新島を外国船に出入りする武士の従僕のように見せかけ、夜陰に乗じて、福士が先に新島のことを伝え頼

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo